

カラーピラミッド・テストと精神分裂病者への適用

中 川 大 倫

目 次

- | | |
|-----------------------------|--------------------|
| 1 序 論 | |
| 2 カラーピラミッド・テストの実施要領 | |
| (1) カラーピラミッド・テストのテキストならびに用具 | |
| (2) 実施方法 | |
| (3) 整理方法 | |
| 1) 色彩分類と集計 | |
| a 色彩の選択頻度 | |
| b 色彩選択の系列様式 | |
| c 色彩コンビネーションによる分類集計 | c 色彩コンビネーションによる解釈 |
| 2) 色彩の選択傾向の解釈 | 3) 形の評定 |
| a 単一色スコアの解釈 | a 色彩優位型(じゅうたん型—C型) |
| b 系列様式による解釈 | b 層配列優位型(層型—L型) |
| | c 構造優位型(構造型—S型) |
| | 4) 形態スコアの解釈 |
| | a 色彩優位型—C型 |
| | b 層配列優位型—L型 |
| | c 構造優位型—S型 |
| | 3 精神分裂病者へのCPTの適用 |
| | (1) 新鮮な精神分裂病者とCPT |
| | (2) 欠陥精神分裂病者とCPT |
| | (3) 1年後の追跡調査 |
| | (4) 総括 |

1 序 論

カラーピラミッド・テストは1950年スイスの Max Pfister によって創案された一つの人格検査である。Pfister は被験者に小さな色カードをピラミッド型にならべる作業を行わせ、作られたピラミッドにみられる色の選択と形の構造化の側面から、被験者のパースナリティをうかがい知ることができると考えた。当初は1個のカラーピラミッド作製であつたが、この1個のカラーピラミッドから恒常なパースナリティの特性を知ることは極めてむづかしい。Pfister のカラーピラミッド・テストに最初の改訂を加えたのは Hiltman と Heiss であった(1950)。Hiltman と Heiss は1個のピラミッドの代りに3個のピラミッドを継続的に作る方法を提案した。この方法は、色の選択と形の構造化に関する分析の過程と範囲を拡大することに役立つことになった。爾来、西ドイツ、フライブルグ大学の Heiss 教授を中心に、多くの実証的な研究と体系化の努力が行われてきた。1956年、Karl はピラミッド作製にあたり、美しいピラミッド3個と醜いピラミッド3個を継続的に作らせるという方法を導入した。美しいピラミッドは、パースナリティの比較的表層の特性を、そして醜いピラミッドは比較的深層の特性をみようとしたものであった。現在はこの方法が一般にとられている。

カラーピラミッド・テストには次のような特徴をあげることができる。

1. 被験者が興味と関心をもって臨むことができる。
2. 作業が極めて簡単であるから、年齢や教育程度の低い人にも実施が可能である。

3. 言語の負担が少ない。
4. 実施に要する時間が少ない。
5. 被験者にとって、自己が何を調べられているかわからない。したがって、被験者の作為のはいる余地がない。

このような特徴から、カラーピラミッド・テストは、典型的な客観的投映法の一つであるといえることができる。しかし、このカラーピラミッド・テストは、ドイツ語文化圏以外においては、またわが国をも含めて、実証的研究の報告が極めて少なく、さらに実用の側面においても、余り利用されているようには思われない。とくに、ロールシャッハ・テストの広大な普及度に比較すると一層この感を深くする。

そこで、本論文においては、カラーピラミッド・テストの実施要領につき簡潔にその要点を記して今後の利用の参考に供したく、同時に、本テストのパーソナリティ特性識別力の吟味に関する実証的研究の一部を併せて論述したいと思う。

2 カラーピラミッド・テストの実施要領

(1) カラーピラミッド・テストのテキストならびに用具

カラーピラミッド・テスト（以下CPTと略称）のテキストとして、現在利用できるものに Schaie と Heiss の Color and personality (1964) がある。筆者は主としてこれによっている。日本語のテキストとしては、川久保芳彦：色彩ピラミッド・テスト（井村恒郎監修，臨床心理検査法，1963）がある。本書は前記テキスト以前のものである。テストには、図のような白紙上に描いたピラミッド型の枠とその枠にならべる色彩カードを用いる。色彩カードは1インチ角で、次のような10色のものである。色によって明度の違いのあるものがあり、合計24枚のカードからなっている。

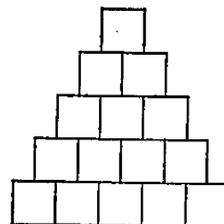


図1 ピラミッド型

Red 1 2.5 R 7/10	Red 2 5 R 4/15
Red 3 5 R 3/12	Red 4 2.5 RP 2/8
Orange 1 2.5 YR 6/14	Orange 2 2.5 YR 7/16
Yellow 1 5 Y 8/14	Yellow 2 2.5 Y 8/12
Green 1 2.5 GY 8/12	Green 2 7.5 GY 7/10
Green 3 2.5 G 5/10	Green 4 2.5 G 2/4
Blue 1 10 B 6/6	Blue 2 5 B 6/13
Blue 3 5 PB 4/10	Blue 4 7.5 PB 2/12
Purple 1 10 PB 8/4	Purple 2 5 RP 4/12
Purple 3 5 RP 2/4	Brown 1 2.5 YR 4/6
Brown 2 2.5 YR 3/4	White N 9.5
Gray 5 Y 7/2	Black N 1

（色名名のあとにはマンセル記号）

1 ピラミッドを作るためには15枚の色票が必要であるから、テストを有効に実施するためには、少なくとも360枚以上の色彩カードを準備する必要がある。筆者は Hans Huber 社製

の色彩カードを使用している。記録用紙は Color and personality 所載の様式を用いている。

(2) 実施方法

検者は被験者の前にピラミッド型の用紙をおき、その傍、被験者から向って右側に十分混ぜ合わせた色彩カードをおき、教示は次のように与える。

「この色カードをとってこのピラミッド型の枠の中の四角の上において下さい。そしてできるだけ美しいピラミッドができるようにならべて下さい。自由にならべかえても結構です。終わったら終わったと言って下さい。時間は計りますが、早く終ることはそれほど大事なことはありません。どうぞ始めて下さい。」

教示の表現は被験者の年齢や理解度によって変えてもさしつかえない。1個のピラミッドが完成したら検者は色ナンバーと所要時間を記録用紙に記載し、色彩カードを元の場所にもどし、よく混ぜ合わせ、さらにもう一度同じように美しいピラミッドを作ることを求める。このようにして、3個の美しいピラミッドを作ってもらったあと、引つづきできるだけ醜いピラミッドを上述の要領で継続的に3個作ってもらい、合計6個のピラミッドを基本資料とする。

なお、被験者にはあらかじめ色盲検査を行い、色盲の程度を確かめておく。色盲は避ける必要がある。検査場には明室をあて、明度不足の場合には人工光線をもって補う。

(3) 整理方法

1) 色彩の分類と集計

ピラミッドの作製に使用された色彩は、個々の色彩カードの使用頻度、同一色の色彩カードが3個のピラミッドに使用された回数(sequence formula), ならびに色彩のコンビネーション(color syndromes, 暖色と寒色)の側面から整理を行う。

a 色彩の選択頻度

各ピラミッド作製に使用された色カードの種類とナンバーは、ピラミッド毎に記録用紙に記入し、その選択数は、美、醜ピラミッド別に、24色に即して合計され、さらに10種の色調に集計される。この数は、1ピラミッド中15回の選択チャンスが3度、つまり、45回の選択チャンスにおいて選ばれ使用された回数である。これを百分率に換算して色彩の選択頻度とする。

b 色彩選択の系列様式

これは、美、醜ピラミッド別に、それぞれ3個のピラミッド作製にあたって、同色系のカードが何回使用されたか、あるいは、全く使用されなかったかを知らうとするものである。色彩選択の系列様式(sequence formula)による分類である。これによって色彩の選好の度排除の度ならびに注意移動の傾向を知ることができる。このために、10種の色彩について、次のような4種の集計を行う。

CS (Constant Sum) 3個のピラミッドすべてに使用された色彩の数

Mis (Sum of Minimal Change) 3個のピラミッド中2個に使用された色彩の数

Mas (Sum of Maximal Change) 3個のピラミッド中1個にのみ使用された色彩の数

AS (Avoidance Sum) 3個のピラミッド中1度も使用されなかった色彩の数

c 色彩のコンビネーションによる分類集計

色彩の選択は単に個々の色彩の選択だけでなく、数個の色彩のコンビネーションの側面から検討を加えることができる。この色彩コンビネーションの一つを color syndromes と言う。これに次のような4種の色彩コンビネーションが使用される。

Nsyn (Normal syndrome) red, green, blue の選択和

Ssyn (Stimulation syndrome) red, orange, yellow の選択和

Dsyn (Drive syndrome) yellow, green, brown の選択和

Asyn (Achromatic syndrome) white, gray, black の選択和

さらに色彩はその感情価の側面から、暖色と寒色に分けられることは広く知られている。本テストの scoring では、使用する24色のカードの中から次のような2群が分類されており、両群の選択和の比較が試みられる。

暖色群 reds, oranges, yellows, green 1, green 2, brown 1

寒色群 green 3, green 4, blues, brown 2

2) 色彩の選択傾向の解釈

a 単一色スコアの解釈

色彩と感情、情緒の傾向や反応行動の傾向との間にある種の関係があるという点については、Goethe の色彩論 (1890) 以来多くの記述や実証的研究の報告がある。ここでは、Schaie と Heiss のテキストからその要点を記しておく。

Red 衝動的な感情と直接的反応傾向を示す。赤の高点は外向きに衝動的な情緒性をあらわし、とくに極端な高点は無統制な爆発的衝動を示す。低点は統制のきいた衝動、ならびに衝動的欲求の満足を遅らせる状態を示す。極端な低点は感情表現の不能、衝動的な欲求表現の不能を示す。

さらに、赤の低点と青の高点がともにある場合には、欲求抑圧の指標とみられ、また、赤の低点と黒の高点がある場合には感情表現の意識的抑制が行われる指標とみられる。

Orange 感情の外的表現の度を示す。橙の高点は、赤と違って必ずしも外部への爆発的行動を意味しない。もちろん、強い情緒的な欲求は存在し、その満足は外向的な表現をとる。そして、その衝動的な表現は直接的かあるいは代償的な形をとる。低点は情緒の否定、抑圧の傾向を示す。高点者はアルコール中毒患者、麻薬中毒患者、性的精神病者にみられるが、他方、創造的な芸術家や生産的な人にもみられるので、高められた衝動レベルを示す指標とみることができる。

Yellow 赤や橙よりも落ついた状態である。高点は感情の安定した、目標に向いよく統制された適切な表現の指標である。低点は衝動欲求を理性的によく社会化された仕方で見現する力が弱いことを示す。Karl (1953) は黄を環境への理性的な順応、客観的な対決の指標と言っている。

Green 情緒を調整し、平衡状態を維持しようとする側面の指標である。これは、また、内的刺激に対する感度、情緒的経験の内化に関する力の指標でもある。これらの特性は有意義な人間関係を維持するために必要であるから、緑は他人の感情に対する感度を示す指標ともいうことができる。高点は内外の刺激に対する適切な感受性を示し、極端な高点は、平衡維持が損われ、内外の情緒的な刺激によって押流されるおそれのあることを示す。低点は感受性の低さ、有意義な人間関係を作る力に限界のあることを示す。極端な低点は、情緒の固定化、凝固化による統制的なメカニズムの損われた状態を示す。

Blue 青はその明暗の程度によって、静かな安定した感情から、湿っぽく抑圧された情緒に対応する。高点はよく統制された感情、情緒の指標であり、極端な高点は過剰抑制のある人、強迫的な人の傾向を示す。低点は感情統制の不良、内的衝動統制の不適当さの指標で

ある。極端な低点あるいは青の0点は内的な統制機能の欠除か抑制を示す。低い青点は精神的な欠陥少年にみられたと Schaie (1962) は述べている。

Purple 紫は不安と緊張に関係する。赤が感情の爆発的表現をあらわすように、紫は個人内の爆発的な動揺のあることを示す。高点は情緒的不適応の指標とみなされ、超高点は精神病の指標とみなされる。精神分裂病者に関する研究では紫の高点が指適されている。

Brown 褐色は原始的エネルギーの要因と関係する。褐色の高点は拒否的で頑固な慣例を無視した原始的衝動の指標である。このような衝動が表面にあらわれる場合には、無視、受身な抵抗、非社会的な行動となる。低点は低いエネルギーのレベルを示し、虚弱な無力な傾向の指標である。褐色選択は成熟とともに減少を示し、老年期に再び増加するといわれる。また、能力の低下した老人には、褐色選択の低下がみられると Becker と Karl (1955) は報告している。

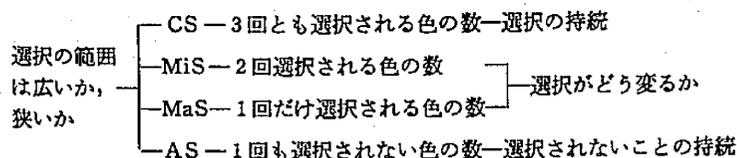
White 平均的な人の場合、白は明るさ、空虚さ以外の何ものでもない。これが他の明るい色とともに選択されると、各種刺激に対する感受性、解放性を示す。だが、白の高点となると持続的な空虚さ、統制の欠除を示すことになる。従ってこれが外部にあらわれる場合には慣例によらない反応傾向を示すことになる。また、白色選択はその程度によって、現実接触と衝動統制の欠除の指標となる。また、超高点と赤の高点がともなっている場合には、無統制な攻撃的行動の指標とみなされる。白の低点は余り注目されていないが、強いていえばステレオ化した慣例になじんだ考え方をする人の指標とされている。

Gray 高まった感情的欲求や反応を調整し抑制する、いわば中和的機能の指標である。灰の高点は感情の抑圧、禁止傾向の指標とされ、神経症者に灰色高点者が多い事実が報告されている (Spren, 1951)。低点は抑圧メカニズムの欠除と解放性を示す指標とされる。

Black 黒の高点は禁止、拘束の指標とされる。極端な高点は病理的徴候とみなされ、ひどい抑うつ状態、自閉的非社会的行動を伴うことがある。低点は抑うつ感情の欠除を保証するものではないが、ひどい禁止や拘束がないことを示唆している。黒の高点は赤の高点とともにある場合、赤の爆発的表現を補償的に調整する役割をもつといえるが、低点はそのような役割を果たす力はないとみなされる。

b 系列様式による解釈

この方式によってみられるところは (図参照)、(1) ある色彩はいつも注意され選択されているか、あるいはいつも気付かれず排除されているか、(2) 選択された色の数は多いか、あるいは少ないか、つまり色彩選択の範囲は広いか狭いか、(3) 注意が、ある色から他の色へ移動するか、あるいは固定し、持続するかである。



これらの点はすべてパーソナリティの重要な次元に関係している。広い範囲にわたって色彩選択する人は、広い刺激場面に注意する人である。限られた色を選択する人は注意の範囲を直接的に狭めることによって、恐らく好ましくない環境、あるいは複雑な環境に対して、自己を防禦する傾向を示している。色彩選択の変性は、適切な仕方、あるいは融通のあ

る仕方では刺激に反応する力、あるいは傾向の反映である。恒常な色彩選択をする人は持続性のある安定したタイプをあらわし、選択の動揺する人はいろいろな表現を行おうと創造的な試みをするタイプを示している。そして、極端な動揺を示す人の場合には調和の破れた不安定な傾向を示すとされる。

c 色彩コンビネーションによる解釈

数個の色彩のコンビネーションから、個々の色彩以上の解釈的な意味を探り出そうという試みが color syndromes である。このような色彩のコンビネーションは数多くつくることはできるが、臨床経験から上述の color syndromes があげられた。

Nsyn 感情調整の典型的なメカニズムであり、正常者に最も多く選択される色彩群である。高点は強力な調整のある証拠で、従って、これは緊張とともに積極的な情緒安定を維持しようとする試みの指標である。低点は、不安定、弱い統制、動揺する情緒性を示すとされる。

Ssyn 感情的に動きやすい傾向の指標で、この高点は、外的刺激に情緒的に反応する人容易に昂奮し、衝動的に反応する人をあらわす。低点は感情表現がむつかしい人、感情の抑圧、否定傾向のつよい人を示す。

Dsyn 動機的レベルの高さを示す指標とみなされる。この高点は高いエネルギーレベルのある証拠で、感情を生産活動に向けようとする力のつよいことを示す。低点は低いエネルギーレベルを示すもので、虚弱反応のパターンを示唆する。

Asyn この種の選択は少く、正常者からは避けられている。これは大体において、抑圧、禁止、拒否、転移を含む感情調整の型に関係する。高点は性格発達の不適當さ、自我の虚弱、神経症傾向を示すものとされる。Heiss (1964) は抑圧、禁止の指標として Asyn をあげることに不満を示し、青、灰、黒の選択和を提唱している。

3) 形の評定

これまで述べた色彩カードの分類と集計は、極めて簡明直載であり、客観的であり、かつ実施が容易である。しかし、これから述べる形の構造上の特性を評定する手続きは、評定者の主観的な判断の影響を受けやすい部分である。Schaie と Heiss は、本テストの客観性を高めるために、評定原則の確立に努めてきたが、筆者は実際にテストを施行し、その結果を評定した経験にもとづき、若干の制約をつけることにした。

カラーピラミッドの形を評定する場合には、二つの観点がある。すなわち、被験者がピラミッドを構成するにあたって形に注目するか、あるいは形を無視して、単純に平面をみて色彩カードを並べるかということである。この観点にたつて、被験者が実際に色彩カードをどのように使用するかによって、3種類の主要なカテゴリが定められている。その第一は色彩が優勢な反応である。この場合は、一様なじゅうたん状の配列が目立つ。第二は、色彩によって層を分ける (color separation) という多少秩序のある配列の仕方である。第三は、体制化の優先する場合で、いわゆる構造化への試みがあらわれているタイプのものである。これら三種の型には、さらにそれぞれ4種の下位分類が使用される。以下その概要を述べる。

a 色彩優位型 (じゅうたん型—C型)

ピラミッドの形のいかなる特徴的な部分にも注意を払うことなく、ランダムに色彩カードを配列する場合から、多少、構造化への試みが色の調和を損う場合まで、4種類の型がある。

1C 純粹じゅうたん型 The pure carpet

色彩カードはランダムに並べられ、カードの色の間に顕著な明度差がなく、また同色の2枚のカードが接近した処におかれていない。色彩の配列と調和に意識的な努力が払われている場合である。

2C アンバランスじゅうたん型 The unbalanced carpet

接近した処に同色のカード、顕著な明度差のあるカードがおかれている。これは、色彩に対する配慮がやや減退しているが、しかし、構造的な配慮はまだみられない場合である。

3C ひきさかれたじゅうたん型 The torn carpet

1個あるいは2個以上の白カードがブレンド（ブレンドとは、白カードが灰色のカードまたは紫1の近くにあるよなう場合をいう）されないままおかれた場合である。しかもこの白カードは相称関係にあってはならない。相称関係があれば、次の4Cとする。

4C 構造化されたじゅうたん型 The structured carpet

ピラミッドの角や軸に同色のカードを用いたり、あるいは単色の層を作ることで、構造化への配慮がみられ、それだけ色彩の調和が損われた場合である。また、2～4個の左右相称関係があれば4Cとする。

b 層配列優位型（層型—L型）

ピラミッドの形を作るにあたって被験者の注意が層に向けられたパターンである。一般に、個々の層は色彩によって相互に分離されている（color separation）。多少構造化への試みを含んだ移向型がある。

5L 単一色層型 The monochromatic layer

ピラミッド全体が単一色のカードで作られたタイプである。時に、明度の異った同一色調の色が層状に配列されることがある。1個のきず（主要な色とは異った色のカードのこと）は許される。頂点のきず、または1個以上のきずのある場合には6Lとする。

6L 多色層型 The multichromatic layer

ピラミッドの各層がそれぞれ単一色で作られている。通常、接近した層の色は異っている。かりに接近した層が同色であっても、二つの異った色彩が使用されるときには、6Lとする。相称関係でなければ、4個までのきずは許される。相称的なきずのある層が、1層のときは7L、2層以上のときは8Lとする。

7L 相称層型 The symmetric layer

ピラミッドの1層または数層にわたって、相称の配列がある。しかし、その相称の関係は他の層とは相互に無関係である。時に、明度の異った同色を用いて相称の関係が作られることがある。中心線について、4個以上の相称があるとき、1個あるいは2個以上のきずは許される。

8L 構造化のある層型 The structured layer

色彩優位が殆んど克服された層型、つまり形優位への移向型である。層型の一般的な特徴を残しながら、些か形構成のデザインがあらわれている。だが完全な形優位に比べると、color separation（色による層配列）の傾向を残している。

c 構造優位な型（構造型—S型）

ピラミッド特有の形態的な部分に色彩カードを配列することによって、形優位の特徴を示す場合である。色彩も、もちろん、注意されるが、被験者は明らかにピラミッドの形を認知

している。色彩はピラミッド全体の構造を作る方向に使用される。

9S 相称構造型 The symmetric structure

色彩カードの配列がピラミッドの軸について行われており、形のデザインがピラミッド全体に関係している。明らかにピラミッドの構造が優位である。この場合、1個のきずは許される。

10S マントルピラミッド型 The mantle pyramid

ピラミッドの左右両辺に同色のカードが並べられる場合である。時に、底辺も同色のことがある。また、時に、単一色であるが異った明度の色が3辺に用いられることがある。中心部には、単一色か、幾つかの色のコンビネーションが使用される。

11S 非相称力動型 The asymmetric-dynamic structure

ピラミッドの構成に1個の単一色三角形、あるいは、2個の同じ多色三角形を含む場合である。9Sに比べると、ピラミッドの中心軸からずれて使用される点が特色である。

12S 階段構造型 The staircase structure

ピラミッドの左（あるいは右）の角から階段状に同色のカードが配列されるパターンである。通常は2色が使用される。2色以上が使われる場合には、多色層型のピラミッドを回転したものとみなされる。従って、6Lとする。時にきずの多い場合があるが、4個まで許容される。5個以上の場合には11Sとする。

以上のように、CPTの形の評定としては12種類のパターンが分類されるが、実際の判定にあたっては、次のような手順を使用すると便利である。

CPTにおける形判定の手順

	もし「イエス」ならば	もし「ノー」ならば
1 構造あるいは相称の試みがあるか	手順4へ	継続
2 ひきさかれたカーペットか	3C	〃
3 アンバランスカーペットか	2C	1C
4 単色ピラミッドか	5L	継続
5 マントルピラミッドか	10S	〃
6 階段ピラミッドか	12S	〃
7 color separation があるか	継続	手順10へ
8 各層が単色か	6L	継続
9 構造化のある層型か	8L	7L
10 構造化されたカーペットか	4C	継続
11 非相称的力動構造か	11S	9S

さらに、形の分類を数値化するために、下位タイプを無視して、C型を0、L型を1、S型を2とし、単純加算をする方法がとられる。いわゆる形態水準 form level である。

4) 形態スコアの解釈

CPTの解釈についての理論的な基礎付の努力は、これまで、色彩選択とパースナリティ特性との関係に関する説明に傾いてきた。その主要な根拠は、形の評定結果を味わうための確実な理論体系を確立することが困難であったからである。従って、Schaie と Heiss も、

形評定の解釈については、比較的限られた実験結果にもとづく些か直観的、かつ、暫定的な記述であることを断っている。しかし、形の類型を大きく3種の型にまとめてみると、C型は未成熟、不安定なパースナリティに対応し、S型は成熟し、適応のあるパースナリティに対応する。そして、L型はその中間の段階に位置づけられると考えられる。これについては、Wewetzer (1951), Seyfried (1957), Schaie & Heiss (1964), 中川 (1973, 1974, 1975, 1976, 1978) らの実証的な研究の裏付がある。

a 色彩優位型—C型

パースナリティの未分化、未成熟、不安定な特性と関係があるとされるが、比較的安定した持続的な適応、あるいは創造的な柔軟な反応への移行過程を示すような下位類型を含んでいる。

1C もっとも色彩優位なパターンである。このパターンが完全なものであるためには、十分な注意と思考が必要であるから、未熟、不安定な人にみられる例は少ない。筆者らの行った非行少年、幼児、精神薄弱児、精神分裂病者には1例もみられなかった。とくに、色彩選択の点で病的な徴候がなければ、創造的柔軟性の証拠として解釈することができる。

2C 未熟なパースナリティの特徴とされる。幼児のテスト記録にはしばしばみられる。成人では、安定した適応の欠除や不安の証拠とされる。

3C パースナリティ障害の証拠とされるもので、精神分裂病者の記録には、しばしばあらわれる。Wewetzerはこのパターンを人格崩壊が進行している徴候と解している。

4C パースナリティ分化の徴候、あるいは、安定型の方に向おうとする努力の証拠とみなされる。これはしばしば、青年にみられるパターンである。もし、1Cの特徴を伴っていれば、この構造化の試みは柔軟性の証拠として解釈される。また、もし、2Cを伴った場合には、不安定感に対する建設的な防禦を示すものとされる。

b 層配列優位型—L型

この種の型は、C型の場合よりも、かなり進んだ分化の方向を示し、他方、また、パースナリティの硬い反応型をもあらわしている。color separation が強力な色彩対比を示す場合には、情緒障害の解釈もなされる。

5L このタイプは成人や子どもには非常に稀である。破瓜型精神分裂病者にはよくみられるという報告がある (Sacher, 1955)。明瞭な病的徴候がない場合には、拒否的な被験者の拒否の指標として、あるいは、テストに対する隠蔽、妨害の試みとして解釈される。筆者らの受刑少年のテスト結果にもこのタイプが多く認められた (中川, 1973)。

6L 硬い反応型、あるいは、情緒障害への傾向の指標とされる。その場合、上述のように層の間の色彩対比の程度を考慮する必要がある。筆者らの精神薄弱児のテスト結果には、このタイプが多く認められた (中川, 1978)。この場合は硬い反応型のあらわれと思われる。

7L かなりよく分化した、比較的安定した人の注意深さ、内気、小心さの指標とされる。

8L これはパースナリティ構造の分化が進行する方向にみられるもう一つの移行型である。ここに心理的な成熟の入口にある人の姿をみる訳であるが、しかし、まだステレオタイプを脱し切れないでおり、また、自己の判断や経験の秩序をしかと信用できないでいる段階である。このタイプは、時に、晩熟の青年や心理療法をうけ経過良好な精神病患者にみられる。

c 構造優位型—S型

良く分化した正常成人によって示されるピラミッド反応の典型的なタイプである。We-wetzer のサンプルの52%はこの型である。この種のピラミッドは良く適応した成人の反応様式である。しかし、神経症者や精神病者でも、構造優位なピラミッドを作ることがある。それは、かれらの病気が、パーソナリティの分化を妨げないか、または、強調させることがあるからである。

9S 成常な成人に最も多いパターンで、成熟と適応の指標である。だがもし、片よった色彩選択と結びつく場合には、被験者の自我中心の自閉的傾向をあらわす。

10S 抑圧と転移の指標とみられる。また、時に、特殊な情緒的欲求に対して、自己防禦のために用いられた衝動統制を示すという解釈がなされることがある。その場合には、マントルの色は統制をあらわし、ピラミッドの中心は阻止された情緒的欲求をあらわす。中心が数種の色を含むときには、強いかっとうがあることを示すものとされる。

11S このタイプは成熟した弾力性の指標とされる。被験者はピラミッド作りにあたって、ピラミッドの明らかな構造に拘束されることなく、ステレオ化した反応傾向を超越する想像力と可能性を示す。時に、また、このタイプは精神障害者のテスト結果にみられることがある。しかし、この場合には、予後が有望であることが示唆される。

12S よく分化したパーソナリティであるが、一部にはげしいかっとうや神経症的問題が内在していることを示すタイプである。

以上、CPTにおける色彩と形に関して、分類、集計、解釈の方法の概要を述べてきた。しかし、テストの結果を十分効果的に味わうためには、標準値との比較をしなければならない。Schaie と Heiss のテキストには、もちろん、標準値が掲載されており、参考にすることができる。但し、この標準値はドイツ人とアメリカ人のサンプルにもとづくものであることを念頭におかねばならない。

3 精神分裂病者への CPT の適用

筆者はこれまでCPTを大学生(1972)、犯罪少年(1972)、精神分裂病者(1975, 1976)、幼児(1978)、精神薄弱児(1978)等に施行し、CPTのパーソナリティに対する識別力を吟味してきた。その吟味の過程を通して痛切に感じたことは、形の評定の困難さであった。特徴の明瞭な資料は、12の類型の何れかに容易に分類することができるが、実際には、類別に迷う事例が決して少くないのである。その理由の一つには、相称関係としてあげられた事例が余りに多いことである。テキストには107組の相称関係が示されているが、これをすべて認めると評定は却ってむつかしくなってくる。そこで筆者は、正立のピラミッドを基準とし、左右水平の方向にある相称関係だけを数えることにした。上述の整理方法の中でとりあげられた相称関係とはこのことである。このような評定の規準に即して精神分裂病者と大学生の資料を再評定し、さらに新たな分析の結果を加えてここに報告することにした。

(1) 新鮮な精神分裂病者と CPT

1) 目的

精神分裂病者には、常人と異った独特の行動傾向がある。その行動にみられる非現実性、自閉性、常同的反復、感情の鈍麻等の特異な傾向は、常人との接触を極めて困難にさせる程

のものである。従つてもし、CPTがパーソナリティの特性について十分な識別力をもつとするならば、そのテスト結果の上に明瞭な特徴をあらわすことが予想される。本研究の目的は、かかる側面からCPTの識別力の吟味をしようとするものである。

2) 方法

CPTの実施は上述したようなSchaieとHeissの方法により、各被験者に美しいピラミッド(Prと略記)と醜いピラミッド(Ugと略記)を各3個作らせる。結果の整理も上述の通りである。精神分裂病者は精神科医の診断により、比較的新鮮な病歴のものを対象(EGと略記)とした。男子30名。年齢、17~45才、平均29.4才。正常対照群(CGと略記)は男子大学生、60名、年齢、18~22才。EGの結果は昭和49年10月、CGのそれは同47年10月にテストを施行し、複数の評定者によって評定されたものを、さらに昭和57年10月、上述のような評定基準にもとづき筆者が再評定を施したものである。

3) 結果と考察

a ピラミッド1個の完成時間

表1 完成時間(分)

		Pr	Ug
EG	M	1.85	1.61
	SD	1.28	1.24
CG	M	4.21	3.16
	SD	2.07	2.18

EGの完成時間はCGに比べて有意的に短い。この点は山下、長山の結果(1971)と一致する。なお、EG、CGとも、Pr、Ug内に有意差はない。また、Pr、Ugの完成時間に関するSub内の相関関係は、EG、 $r=0.71$ 、CG、 $r=0.47$ であった。EGはCGに比較して、Pr、Ugともに完成時間は短いといえる(表1)。

b 色彩選択

色彩の選択を10種の色にまとめたものが表2である。表中の平均値は各3個のピラミッドに使用された色彩カードの%値による。各色ともEG、CG間に有意差を認めないが、Pr、Ugとも比較的EGに多く選択された色に褐色がある。これは拒否的で頑固な、慣例を無視した原始的な衝動のあることを示す。これが表面化すると非社会的な行動となりやすい。この色の多い選択は精神障害者や能力の低下した老人にみ

表2 色彩の選択

	Pr				Ug			
	EG		CG		EG		CG	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
Red	18.4	8.9	14.7	12.2	14.9	8.5	16.2	12.5
Orange	11.8	6.6	13.3	10.0	3.4	4.0	2.7	5.6
Yellow	11.9	9.7	13.6	9.5	3.5	4.9	4.1	10.4
Green	18.2	7.1	22.2	13.4	16.1	9.8	14.7	8.8
Blue	16.7	6.7	19.2	13.3	8.9	7.5	10.4	9.4
Purple	8.7	6.5	6.4	9.2	12.9	8.0	14.4	10.1
Brown	5.8	7.1	3.2	7.2	13.3	14.7	10.4	8.1
White	3.1	2.9	3.2	6.7	4.4	7.6	2.8	6.9
Gray	1.3	2.1	1.2	9.1	4.2	6.4	5.7	8.1
Black	3.8	8.6	3.1	9.0	18.2	17.2	18.1	13.9

られるといわれる。この結果は Wewetzer (1951) の所見と一致する。また, Pr, Ug を通じて EG に比較的少ない色に青色と黄色がある。内的統制の弱さ, 不適当さを示すと思われる。Brenngelmann (1953) に同様な結果の報告がある。

c 色彩選択の系列様式

これは, 3個のピラミッドに同一の色彩カードが選択される傾向を示す指標であるが, 結果は表3に示した通りである。EG, CG 間の有意差は, Pr の結果にみられた。EG の CS (3個のピラミッドに3回とも選択された色の数) が CG に比べて多く, これに反して, AS が少ない。これは, EG が色彩の選択に際して, 恒常な傾向を示す度合いが高いことを示唆している。

表3 色彩選択の系列様式

	Pr				Ug			
	EG		CG		EG		CG	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
CS	3.9	2.0	2.2	2.1	3.6	2.3	3.1	2.0
MiS	2.0	1.5	2.2	1.6	2.4	1.5	2.3	1.4
MaS	2.0	1.6	2.1	1.7	1.5	1.3	2.4	1.5
AS	2.1	1.5	3.6	1.8	2.6	2.2	2.2	1.4

〈 〉は1%以下の危険率の有意差を示す

b 色彩のコンビネーション

color syndromes について, EG, CG 間に有意差はみられないが, Pr, Ug とも EG に比較的少ない傾向のものに Nsyn (赤, 青, 緑の選択和) がある。これは情緒的な統制の弱さを示すといわれる。Heiss (1964) のいう Blue/Gray/Black syndrome も EG が少ない。これも内的統制の欠陥をあらわすものと思われる。さらに, EG に少ない指標に Dsyn がある。これは, エネルギーレベルの低さを示すものである (表4)。

表4 color syndromes

	Pr		Ug	
	EG	CG	EG	CG
Nsyn	53.3	56.1	39.9	41.3
Ssyn	42.2	41.6	21.8	23.0
Dsyn	35.9	39.0	32.9	29.2
Asyn	8.2	7.5	26.8	26.6
Blue / Gray / Black	21.8	23.3	31.3	34.2

色彩カードの選択を, 暖色群 (W. C.) と寒色群の (C. C.) の側面からまとめた結果が表5である。選択チャンス45回中に占める割合別に人数 (N) を示してある。EG, CG 間において, Pr, Ug, とも暖色カードの選択について有意差はないが, 寒色カードの場合, Pr に

表5 暖色 (W.C.) と寒色 (C.C.) の選択

	Pr								Ug							
	EG				CG				EG				CG			
	W.C.		C.C.		W.C.		C.C.		W.C.		C.C.		W.C.		C.C.	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
100					1	1.7										
90																
80	2	6.7			6	10.0	1	1.7					1	1.7	1	1.7
70	2	6.7			7	11.7										
60	8	26.7			11	18.3	1	1.7			3	10.0	3	5.0	7	11.7
50	8	26.7	3	10.0	14	23.3	2	3.3	1	3.3	6	20.0	1	1.7	18	30.0
40	6	20.0	8	26.7	11	18.3	6	10.5	7	23.3	13	43.3	5	8.3	16	26.7
30	3	10.0	12	40.0	4	6.7	8	13.3	7	23.3	5	16.7	14	23.3	9	15.0
20	1	3.3	3	10.0	5	8.3	14	23.3	5	16.7	1	3.3	20	33.3	3	5.0
10			3	10.0	1	1.7	22	36.7	6	20.0	1	3.3	10	16.7	6	10.0
0			1	3.3			6	10.0	4	13.3	1	3.3	6	10.0		

おいて CG の方が選択の少ない方に傾いている。これに対して、EG には寒色カードの多い選択者が目立つ。これは EG の行動傾向にみられる孤独、人をよせつけないような冷たさを示唆すると思われる。

表6 ピラミッドの構造

	Pr				Ug			
	EG (30)		CG (60)		EG (30)		CG (60)	
	N	%	N	%	N	%	N	%
1C			2	1				
2C	9	10	12	7	12	13	28	16
3C	9	10	5	3	11	12	15	8
4C	33	37	32	18	25	28	50	28
C	51	57	51	29	48	53	93	52
5L	3	3	9	5	3	3	7	4
6L	14	16	36	20	18	20	14	8
7L			5	3	4	5	3	2
8L	1	1	3	2			3	2
L	18	20	53	30	25	28	27	15
9S	12	13	35	19	4	5	13	7
10S	1	1	11	6				
11S	8	9	24	13	12	13	37	21
12S			6	3	1	1	10	6
S	21	23	76	41	17	19	60	33

e ピラミッドの構造

結果は表6に示した通りである。表のN値は各Subが作った各3個のピラミッドを型別に分けたものである。これを、さらに、C型、L型、S型にまとめてみると、Pr、UgともEG、CG間に有意差が認められた。EGにおいては、Pr、Ug間に構造型の一致するもの48.9%あり、CGではこれに対して32.8%であった。この点からEGの方にピラミッド作成に際し、固執傾向のあることがうかがえる。表6でわかるように、EGにC型が多く、CGにS型が多い。この傾向は犯罪少年(中川, 1972)や精神薄弱児(中川, 1978)にもみられるが、相異するところは下位タイプにある。CGに比して、EGに多い下位タイプは、2C(適応の欠除)、3C(人格障害の指標、人格崩壊進行の兆)、4C(人格分化の移行段階)等であり、Ugで6L(硬い反応型)が目立つ。少ない傾向のタイプは、9S(成熟と適応の良さを示す指標)、10S(自己防禦のための衝動統制)、11S(成熟と弾力性のある人格を示す指標)である。3Cの多い点はWewetzer (1951)、O'Reilly et al (1957)と一致する。

(2) 欠陥精神分裂病者とCPT

1) 目的

新鮮な精神分裂病者にCPTを施行した前述の研究において、精神分裂病者に特有と思われる幾つかの特徴を見出した。そこで、もし、CPTに十分な識別力があるとすれば、精神分裂病の病状がより進行した患者の場合、新鮮な患者にみられた傾向が、よりはっきりとしたかたちで捉えられる筈である。欠陥精神分裂病者を研究対象として選んだ理由はそこにある。本研究では、欠陥精神分裂病者にCPTを施行し、CPTの識別力を再度確かめようとするものである。

2) 方法

CPTの実施要領は前記の場合と同様である。実験群(EG)は欠陥精神分裂病者(接枝分裂病、てんかんを併せもつ患者を除く)として、精神科医の診断により決定されたものである。男子、30名。年齢、20~40才。平均36.8才。在院期間6ヶ月~23年、平均8.6年。EGの結果は、昭和50年10月に実施し、複数の評定者によって評定されたものを、さらに、昭和57年10月、上述の評定規準にもとづき、筆者が再度評定を施したものである。CGは前回と同様の大学生である。

3) 結果と考察

a 1ピラミッドの完成時間

EGはCGに比して完成時間が有意的に短い(表7)。また、Sub内のPr、Ug完成時間の相関関係は+0.91であった。この値は新鮮な分裂病者の0.71よりも高い。このような傾向は、分裂病者の型にはまった固執的反応を示すものと思われる。

b 色彩の選択

結果は表8に示した通りである。各色ともEG、CG間に有意差をみない。Sub間のばらつきがかなり大きいので、きめ手となる特性は認めたいが、大体の傾向として、Pr、Ugを通じてEGの選択が多い色として白色がある。これはWewetzer (1951)、Frohoff, (1953)、O'Reilly et al (1957)らの結果に一致する。紫はUgの場合は目立っていないが、Prの場合、EGに多く選択されている。不適応の反映とされ

表7 完成時間(分)

		Pr	Ug
EG	M	1.91	1.87
	SD	0.83	0.68
CG	M	4.21	3.1
	SD	2.07	2.18

^は1%以下の危険率の有意差

表8 色彩の選択

	Pr				Ug			
	EG		CG		EG		CG	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
Red	15.1	7.6	14.7	12.2	14.1	7.2	16.2	12.5
Orange	9.3	7.6	13.3	10.0	4.4	3.9	2.7	5.6
Yellow	11.8	8.7	13.6	9.5	5.4	4.8	4.1	10.4
Green	18.3	9.3	22.2	13.4	18.8	10.5	14.7	8.8
Blue	18.5	8.5	19.2	13.3	10.5	7.9	10.4	9.4
Purple	8.5	6.6	6.4	9.2	14.1	8.1	14.4	10.1
Brown	6.1	6.9	3.2	9.2	8.1	6.8	10.4	8.1
White	4.2	6.9	3.2	6.7	6.4	10.2	2.8	6.9
Gray	2.8	4.5	1.2	9.1	5.9	8.1	5.7	8.1
Black	5.2	8.2	3.1	9.0	12.0	16.9	18.1	13.9

ているもので、Wewetzer (1951), Brengelmann (1953) の報告にも記載されている。

c 色彩選択の系列様式

結果は表9に示してあるが、その傾向は全く新鮮な分裂病者の場合と同じである。CS(3個のピラミッドに3回とも選択される色の数)が、Pr, UgともEGに多い。これはEGに同一色が引きつづき使用される機会が多いことを示しており、分裂病者の固執傾向をあらわすものと考えられる。

表9 色彩選択の系列様式

	Pr				Ug			
	EG		CG		EG		CG	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
CS	4.4	2.1	2.2	2.1	4.0	2.2	3.1	2.0
Mis	1.8	1.6	2.2	1.6	2.5	1.3	2.3	1.4
Mas	1.6	1.0	2.1	1.7	1.5	1.3	2.4	1.4
AS	2.1	2.0	3.6	1.8	2.0	1.8	2.2	1.4

《 》 はそれぞれ1%、5%以下の有意差を示す

d 色彩のコンビネーション

color syndromes については、新鮮な分裂病者の場合と同様に、EGのPrにおいて、Asyn(白, 灰, 黒の選択和)が著しく多い。自我の虚弱さ、人格発達の不適当さの反映と思われる(表10)。また、前回と同じように、内的調整の弱さ、エネルギーレベルの低さをもうかが

表10 color syndromes

	Pr		Ug	
	EG	CG	EG	CG
Nsyn	51.9	56.1	43.4	41.3
Ssyn	36.2	41.6	23.9	23.0
Dsyn	36.2	39.0	32.3	29.0
Asyn	12.2	7.5	24.3	26.6
Blue/Gray/Black	26.5	23.3	22.5	34.2

表11 暖色と寒色の選択

	Pr				Ug			
	EG		CG		EG		CG	
	W.C.	C.C.	W.C.	C.C.	W.C.	C.C.	W.C.	C.C.
	N %	N %	N %	N %	N %	N %	N %	N %
100			1 1.7					
90								
80			6 10.0	1 1.7			1 1.7	1 1.7
70			7 11.7					
60	5 16.7	1 3.3	11 18.3	1 1.7		5 16.7	3 5.0	7 11.7
50	10 33.3	4 13.3	14 23.3	2 3.3	2 6.7	1 3.3	1 1.7	18 30.0
40	11 36.7	12 40.0	11 18.3	6 10.5	12 40.0	15 50.0	5 8.3	16 26.7
30	2 6.7	9 30.0	4 6.7	8 13.3	4 13.3	6 20.0	14 23.3	9 15.0
20	1 3.3	3 10.0	5 8.3	14 23.3	7 23.3	1 3.3	20 33.3	3 5.0
10		1 3.3	1 1.7	22 36.7	3 10.0	2 6.7	10 16.7	6 10.0
0	1 3.3			6 10.0	2 6.7		6 10.0	

うことができる。

暖色カードと寒色カードの選択傾向は、新鮮な分裂病者の結果と全く同じであり、Prの場合に、寒色カードを多く選択するものが多い(表11)。

表12 ピラミッドの構造

	Pr				Ug			
	EG (30)		CG (60)		EG (30)		CG (60)	
	N	%	N	%	N	%	N	%
1C			2	1				
2C	16	18	12	7	10	11	28	16
3C	9	10	5	3	8	9	15	8
4C	32	36	32	18	39	43	50	28
C	57	64	51	29	57	63	93	52
5L	3	3	9	5	4	5	7	4
6L	16	18	36	20	7	8	14	8
7L	2	2	5	3	2	2	3	2
8L			3	2			3	2
L	21	23	53	30	13	14	27	15
9S	5	6	35	19	5	6	13	7
10S			11	6				
11S	7	8	24	13	14	16	37	21
12S			6	3	1	1	10	6
S	12	14	76	41	20	23	60	33

e ピラミッドの構造

結果は表12に示した通りである。構造の分布を三種の類型にまとめると、Prの場合、EG、CG間に有意差を認めた。この結果は、Wewetzer (1951), Frohoff (1953) ならびに、O'Reilly et al (1957) らの記述に添うものである。Ugの場合には、EG、CG間に有意差を認めなかった。しかし、Ugの傾向は、Prの場合と同様に、S型が少なく、C型が多い。構造分布のこのような傾向は、新鮮な分裂病者の場合と同様であり、むしろ、その特徴が強化されたかたちで観察されたと思われる。

EGに多いタイプは、Prの場合、2C(適応の欠除)、3C(人格崩壊の兆)、4C(移行型)で、Ugでは4Cが目立つ。少ないタイプは、Prの場合、9S(成熟と適応の指標)、11S(成熟した弾力性)で、Ugでは2C(適応の欠除)、11S、12S(よく分化したパーソナリティ)が目立っている。Ugの場合に、EGの2CがCGに比較して少ないようにみられるが、これはCGの値がやや多いために目立つのである。CGの2Cが多いのは、恐らく青年期に相当する大学生の心理的な深層にある不安傾向を反映しているかと思われる。

なお、Pr、Ugのピラミッド構造間の一致の程度を吟味したところ、EGは65.6%(前回は48.9%)、CGは32.8%であった。この点もEGの方に固執性をうかがうことができる。

(3) 1年後の追跡調査

1) 目的

これまで、筆者は、新鮮な精神分裂病者ならびに欠陥精神分裂病者を対象として、CPTを実施し、CPTの結果と患者の特徴的な行動との対応関係について幾つかの知見を得てきた。次に本研究においては、同一の患者集団を対象としてCPTを実施し、一定の期間において再度CPTを施行し、患者の病状変化とCPT結果との対応関係の側面からCPTの妥当性を吟味しようとするものである。

2) 方法

CPTの実施要領は、これまでの実験と同様である。実験群(EG)は新鮮な分裂病者の中から、1年後にテストすることのできた患者15名とし、病状の変化については医師の助言によった。第一回目のテストと第二回目のテストとの間隔は1年とした。CPTの妥当性の吟味のための再テストには4~5週間の期間が使用されているが(Schaie and Heiss, 1964)、筆者は1年とした。この期間が短ければ、被験者はテストの内容を記憶しており、その影響をうける。分裂病者の中にも1年前のテストのことを記憶していたものが数名いた。筆者が採用した期間の1年というのは、対象が患者である場合、病状の変化がある。筆者は2回のテスト結果と病状変化の対応関係を比較する方法をとった。第一回目のテスト結果には、第1実験時の新鮮な精神分裂病者のCPTの結果を使用した。従って、1年後テストすることのできた患者の結果を、第1実験時の資料から抽出し使用した訳である。患者15名中2名は退院し、通院して治療を受けていたので、外来でテストを行った。13名は入院中の患者である。年齢、20~37才。平均、28.1才であった。

3) 結果と考察

a ピラミッド1個の完成時間

ピラミッド1個の完成するに要する時間は、Prの場合、第1年目115.7秒、第2年目104.2秒、Ugの場合、第1年目96秒、第2年目89秒で、その時間はともに非常に短い。

b 色彩選択

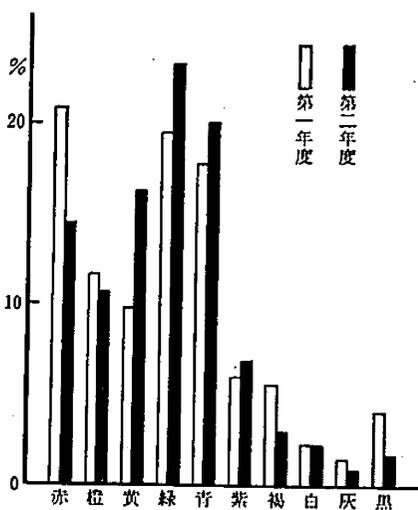


図2 色彩の選択 (Pr)

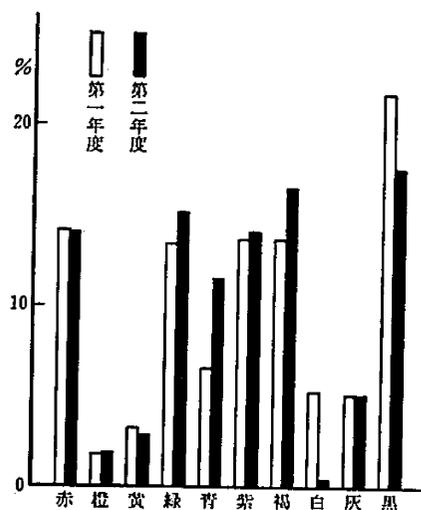


図3 色彩の選択 (Ug)

表13 色彩選択の系列様式

	Pr				Ug			
	第1年度		第2年度		第1年度		第2年度	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
CS	3.5	2.1	3.2	1.9	2.5	1.8	4.1	1.4
Mis	1.9	1.5	1.7	1.0	2.8	1.7	1.5	1.0
Mas	2.1	1.9	2.2	1.2	1.6	1.1	1.5	1.4
AS	2.4	1.7	2.9	1.6	3.1	2.3	2.9	1.9

表14 color syndromes

	Pr		Ug	
	1年度	2年度	1年度	2年度
Nsyn	53.3	58.0	33.6	41.1
Ssyn	42.7	41.6	19.6	18.9
Dsyn	34.9	42.7	30.4	34.7
Asyn	8.2	5.1	30.9	23.6

結果は、図2、3に示した通りである。Prでは、第2年目、赤黒が減少し、黄、緑、青が増加している。病状好転の方向である。Ugでは、白、黒が減少し、青、緑が増加している。この点も好転の方向である。しかし、褐色の増加は分裂病の特色を示していると思われる。

c 色彩選択の系列様式

表13に示した通りである。Prの場合、第1年目、第2年目の結果は全く一致しているが、

Ug の場合には、CS が第2年目において増加している。この点から、恒常な選択傾向が強まったことをうかがうことができる。

d 色彩のコンビネーション

表14に示した通りである。Pr, Ug ともに第2年目において、Nsyn, Dsynが増加の傾向を示し、Asynが減少している。これはともに病状の好転を思わせる方向である。

e ピラミッドの構造

表15に示した通りである。C型, L型, S型の大分類で比較すると、第1年目, 第2年目の結果は大体一致している。しかし、下位タイプを比較してみると、両者の間に相違がみられる。すなわち、Pr, Ug ともに第2年目に3C, 5L, 9S, 11Sが減少し、4C, 6Lが増加している。3C, 5Lの減少, 4Cの増加は病状好転の兆しと思われるが、9S, 11Sの減少は逆に病状が好ましくない方向を示している。6Lは硬さの指標であるから、この指標の増加も病状の進行を思わせるものである。

表15 ピラミッドの構造

	Pr				Ug			
	1 年 目		2 年 目		1 年 目		2 年 目	
	N	%	N	%	N	%	N	%
1C								
2C	8	18	4	9	4	9	4	9
3C	2	4	1	2	3	7	1	2
4C	15	33	17	38	12	27	20	44
C	25	55	22	44	19	42	25	56
5L	3	7	1	2	3	7		
6L	6	13	12	27	10	22	13	29
7L			1	2	2	4	2	4
8L	1	2						
L	10	22	14	31	15	33	15	33
9S	5	11	3	7	2	4	1	2
10S	1	2	2	4				
11S	4	9	3	7	8	18	4	9
12S			1	2	1	2		
S	10	22	9	20	11	24	5	11

上記の色彩の選択や構造の分類の比較は、15例の結果の全体的な比較であるから、個々の患者の病状との対応は明確でない。そこで医師の病状診断の結果を手がかりとして、CPTの結果との対応を吟味してみた。まず、テスト第二回目の時点における患者の病状が、第一回目のテスト時点に対してどう変っているかについての医師の所見を、好転、不変、悪化の3段階に分けた。一方、CPTの構造評定における形態水準をそれぞれ集計し、その差をとり、形態水準からみた変化の傾向を好転、不変、悪化と分けた。すなわち、差がプラスの場合好

表16 病状とテスト結果の関係

		病 状			
		悪 化	不 変	好 転	計
形 態	好 転	3	1	3	7
	不 変		4		4
水 準	悪 化	2		2	4
	計	5	5	5	15

転, 0は不変, マイナスは悪化ときめた。個々の患者に即して整理した両変数による分布は表16のようになった。この結果からは, 病状とCPTの構造評定との対応について, 有意な関係を認めることはできない。もちろん, 形態水準の値がCPTの検出力を左右すると定めることは困難である。しかし, 精神分裂病者の構造評定の結果が, C

型, L型, S型の順に少なくなっている傾向を示し, これが正常大学生の構造評定の分布と逆の方向にあるという事実からすると, C型を0, L型を1, S型を2とする形態水準の定め方には, 一応の根拠があるといえる。このような考察からすると, 形態水準の側面からみたCPTの識別力には限界があると結論せざるを得ない。

(4) 総括

CPTの人格識別力を吟味しようとして企画された本研究において, 筆者は特異な行動傾向を示す対象として, 精神分裂病者を選択し, 正常対照例として大学生をあてた。選択された大学生がすべて全く正常であるかどうかについては保証しがたい。しかし, 通常の生活を送っている大学生と病院において専門医の治療を受けている精神分裂病者とは, 群として見た場合, 顕著な行動の相違をみる事ができる。両群間のテスト結果に明瞭な相違があるとなれば, それは行動傾向の相違に対応させることができる。

以下, 目立ったところをあげてみよう。

1) ピラミッド作成に要する時間は, 分裂病者の方が短く, かつ, Pr, Ug間につき,

Sub内の相関関係は高い。この傾向は精神薄弱児にもみることができる。これは精神運動の速度が早いというよりも, 精神的世界の構造が正常と異なるところに起因するものと思われる。正常者に比して, 分裂病者の精神的世界の構造が狭く, 内容的にも分化, 組織化の度が少なくなっているために, 移動の時間が短くみられるのであろう。また, Sub内の相関が高いことは固執傾向の強さを示している。ともに, 顕著な特徴であるが, 精神薄弱児との間を区別することはむづかしい。

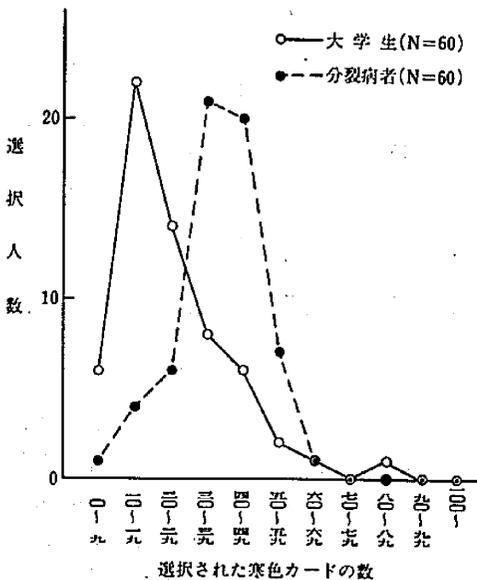


図4 寒色カードの選択 (Pr)

2) CPTの色彩選択の集計整理は客観的で, 評定者の主観の入る余地はない。しかし, 単一色で, 両群間の有意差をみることはできなかった。分裂病者に比較的多い色に, 白, 紫, 褐, 黒があり, 少ない色に, 黄, 緑, 青がある。色彩の選択は, 単一色

のスコアとともに、色のコンビネーションの側面からも考える必要がある。分裂病者には、白、灰、黒の選択和である *Asyn* が多く、*Nsyn*、*Dsyn* が少ない傾向が認められた。これらはいずれも精神分裂病者の行動特徴とも対応するものと考えられる。色のコンビネーションでは、また、寒色カードの選択の多い人が、分裂病者に多い点も注目できる。図4は、新鮮な分裂病と欠陥分裂病者の結果を合計して、大学生の結果と比較したもので、その分布には有意差がみられた ($\chi^2=27.86 > \chi^2_{0.001}$)。分裂病者の冷やかな人をよせつけないパーソナリティの一面を裏付けるものと思われる。

また、色彩選択の系列様式からみた場合に、CS、つまり、3個のピラミッドに3回とも選択される色の数が多いという事実が、新鮮な分裂病者にも、欠陥分裂病者にも、一貫して認められた。これは、精神分裂病者の反復性、固執性と対応するものとして注目できる。しかもCSの多い点は精神薄弱児にみられないので、精神薄弱児との間を区別する指標ともいうことができる。

3) ピラミッドの構造評定においては、評定の規準を若干整理することによって、判定に迷うことが少なくなった。しかも、その結果からみたところ、精神分裂病者にはC型反応が多く、大学生にはS型反応が多く認められ、かつ、この傾向は欠陥分裂病者により一層強化されたかたちで認められた。しかし、この傾向は、前述のように犯罪少年(中川, 1972)や精神薄弱児の資料(中川, 1978)にも認められるところである。もちろん、下位タイプの分布は異なる。だがそれでも、分裂病者の反応分布は、精神薄弱児の反応分布に類似している。この故に、CPTの形の評定から、精神分裂病者を決定づけることはかなりむづかしくなってくる。精神薄弱児との違いをみるためには、色彩選択と平行してみる必要がある。例えば、sequence formulaのCSやcolor syndromeの*Asyn*は、分裂病者において顕著に多くみられるが、精神薄弱児にはそのような傾向が認められないからである。

4) 前述した第1、第2の実験は、精神分裂病者と対照群である大学生の間の全体的な傾向の比較に焦点がおかれた。そして、群として、分裂病者を他から分けるCPTの特徴が幾つかあげられた。第3の実験では、同一対象の追跡に焦点がおかれた。この実験では、1年後の結果に、色彩選択の上にも、形の評定の上にも、分裂病の特徴を強める結果と弱める結果が同時に認められた。これは矛盾である。そこで、さらに、Subに即して、医師の病状所見とCPTの形態水準とを比較したところ、その間に有意な相互作用を認めることができなかった。この結果はCPTの識別力に対して、ある程度の疑問をなげかけることになった。

5) 精神分裂病は非常に複雑な病態をもつ疾患である。従って、CPTの資料においてもなお、分析の余地はあるであろう。とくに、Pr、Ug内の吟味は残された領域である。Schaieらは、得点を標準値に換算し、Pr、Ug間のDスコアを求め、評価の手がかりとしている。わが国にはまだ標準値ができていないので、筆者はその方法をとらなかった。Pr、Ug間の関係の吟味は残された課題である。

本研究を実施するにあたって、心よく御協力下され、また、貴重な御助言を下された城西病院ならびに松南病院の院長先生はじめ諸先生、看護の方々から感謝の意を表します。また、本研究のためにテストの実施、結果の整理を通じ、多くの時間と労力を与えて下さった久保村日出男君はじめ研究室の若き同学の諸士に心から感謝の意を表します。

参 考 文 献

- BECKER, HANNA and KARL, H. Normwerte der Farbhäufigkeit in schönen und hässlichen Pyramiden. *Stud. z. diagn. Psychol. (Biel)*, 1955, 3, 121-132.
- BRENGELMANN, J.C. Farbwahl, Verlaufsform und Versuchsdauer des Farbpyramidentestes bei normalen und abnormalen Versuchspersonen. Teil I. *Psychol. Rdsch.*, 1953, 4, 33-43.
- FROHOFF, W. Untersuchungen mit dem Farbpyramidentest bei Schizophrenen. *Z. exp. angew. Psychol.*, 1953, 1, 145-181.
- 川久保芳彦 色彩ピラミッド・テスト 井村恒郎編, 臨床心理検査法 医学書院, 1963.
- 中川大倫 少年受刑者の CPT 所見 犯罪心理学研究, 第10巻, 特別号, 1973.
- 中川大倫 少年受刑者における CPT 所見(統) 日応心, 第41回大会論文集 1974.
- 中川大倫 CPT の精神分裂病者所見, 日心, 第39回大会論文集, 1975.
- 中川大倫 少年受刑者に施行したカラーピラミッド・テストとロールシャッハ・テストの関連について 犯罪心理学研究 第12巻特別号, 1975.
- 中川大倫 CPT の精神分裂病者所見(統) 日心, 第40回大会論文集, 1976.
- 中川大倫 精神薄弱者の CPT 所見, 日応心, 第45回大会論文集, 1978.
- O'REILLY, P.O., HOLZINGER, R. and BLEWETT, D. The Pfister Colored Pyramid Test. *J. nerv. ment. dis.*, 1957, 125, 385-387.
- SACHER, H. Eintönige Lösungen bei Hebephrenen im Farbpyramiden-Test mit geordnetem Farbangebot. *Z exp. angew. Psychol.*, 1955, 3, 547-574.
- SCHAEK, K.W. and HEISS R. Color and Personality, Hans Huber, 1964
- SCHAEK K.W. The color pyramid test : a nonverbal technique for personality assessment. *Psychol. Bull.*, 1963, 60, 530-547.
- 塩入円祐 精神医学ハンドブック, 日本文化科学社, 1973.
- SPREEN, O. Befunde an Kindern und Jugendlichen. In : Heiss, R. and Hiltmann, H. *Der Farbpyramiden-Test*. Bern : Huber, 1951 (a).
- SPREEN, O. Befunde bei Psychischen Konfliktsituationen und Lungentuberkulose. In : Heiss, R. and Hiltmann, H. *Der Farbpyramiden-Test*. Bern : Huber, 1951 (b).
- 山下栄子, 長山泰久 Color Pyramid Test についての研究(2)——精神分裂病者患者への適用, 日応心, 第38回大会論文集, 1971.
- WEWETZER, K.H. Beschreibung und Gliederung der Merkmale und Deutungshinweise. In : Heiss, R. and Hiltmann, H. *Der Farbpyramiden-Test* Bern : Huber, 1951 (a).
- WEWETZER, K.H. Befunde bei Psychosen. In : Heiss, R. and Hiltmann, H. *Der Farbpyramiden-Test*. Bern : Huber, 1951 (b).
- WEWETZER, K.H. Verlaufstypen im Farbpyramidentest. In : Hiltmann, Hildegard (Ed). *Verlaufsanalyse in der psychologischen Diagnostik*. Bern : Huber, 1954.